

プログラム・ノート

解説=飯尾洋一

| 北欧叙事詩からミュージカルまで……物語に由来する音楽

本日のプログラムはどれも物語に由来する曲ばかり。ノルウェーの作曲家グリーグの『ペール・ギュント』は、イプセンの戯曲のための劇音楽として作曲されました。フィンランドの作曲家シベリウスは同国の国民的叙事詩「カレワラ」にもとづいて4つの伝説曲を作曲しています。

20世紀アメリカの作曲家であり大指揮者でもあったレナード・バーンスタインは、ヴォルテールの原作を用いて『キャンディード』を書きあげました。そして『ウエスト・サイド物語』はシェイクスピアの「ロミオとジュリエット」を下敷きにしたミュージカルの大傑作。つい最近、ステイーヴン・スピルバーグ監督により映画がリメイクされて話題を呼びました。

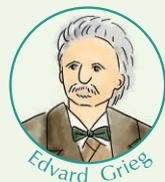
愛、冒険、風刺、伝説……。物語は作曲家にどんなインスピレーションをもたらしたのでしょうか。



マエストロ栗田がさまざまな物語にちなむ名曲の数々をお届けします
(写真は2021年8月の「ハートフルコンサート」にて、東京フィル副理事長 黒柳徹子とともに) ©友澤綾乃

型破りな主人公ペールの奇想天外な冒険譚

エドヴァルド・グリーグ (1843-1907) はノルウェーを代表する作曲家。自国の文化や伝統を作品に取り入れた国民楽派の作曲家として知られています。同国の国民的文豪イプセンの同名戯曲のために**劇付随音楽『ペール・ギュント』**を作曲しました。



「ペール・ギュント」は奇想天外な物語です。舞台は19世紀初めのノルウェーの山岳地帯ではじまり、やがてモロッコの海岸、サハラ砂漠、カイロへと移り、型破りな主人公ペールの生涯が描かれます。

「朝」はモロッコの海岸でペールが日の出を迎える場面の音楽。フルートの冴え冴えとした音色が印象的です。物語の後半に登場する音楽で、この場面のペールはすでに中年を迎え、奴隷売買など怪しげな事業で荒稼ぎをして、金持ちになっています。

「イングリッドの嘆き」で描かれるのは、若い日のペールの姿。貧しい農家の息子ペールはなんの根拠もなく将来は王様か皇帝になるとうそぶく自信家です。地主の娘イングリッドが結婚式を迎えると、招かれもしないのに屋敷に乗り込んで、花嫁を強奪してしまいます。しかし、ペールは結婚式で出会った娘ソルヴェイグのことを忘れられず、あっさりとイングリッドを放り出してしまうのでした。

「山の魔王の宮殿にて」はスポーツシーンやテレビCMなどでよく使われる人氣曲。イングリッドを捨てたペールは、山奥で出会った女に求婚します。ところが女の正体は魔王(トロールの王)の娘。ペールに「人間をやめて、トロールとして生きよ」と迫ります。慌てて逃げ出すペールと追いかけるトロールたち。迫力満点の音楽です。

「オーゼの死」ではペールの母親オーゼの最期が描かれます。弦楽器が悲痛なメロディをくりかえします。山小屋でペールが見守る中、安らかに旅立つオーゼ。そして、ペールは放浪の旅へと出発します。

「アニトラの踊り」はエキゾチックなダンスの音楽。財を成してモロッコにやってきたペールは、裏切りにあい、財産を奪われてしまいます。砂漠をさまようペールは、首長の娘アニトラに出会い、すっかり魅了されてしまうのでした。

「ソルヴェイグの歌」はこの劇音楽でもっとも味わい深い名曲でしょう。最初はペールを拒絶したソルヴェイグでしたが、やがてペールのすべてを受け入れ、一途な愛を貫きます。放浪の旅に出たペールをいつまでも待ち続ける姿が、哀愁を帯びた曲想で表現されます。

フィンランドの民族叙事詩「カレワラ」に基づく名曲

フィンランド最大の作曲家 **ジャン・シベリウス** (1865-1957) も、グリーグと同様に自国の文化や伝統を積極的に作品に取り込みました。とりわけ大きな着想源となったのが国民的叙事詩「カレワラ」。これは古くからフィンランドに伝わる神話や伝説を一大叙事詩として集大成したものです。題の「カレワラ」とは「英雄の国」の意味で、さまざまな人物が登場します。そのひとりがレンミンカイネン。武術にも魔法にも秀でているのですが、身勝手に女たらしの若者です。



あるとき、レンミンカイネンはトゥオネラ（黄泉の国）の川で敵に待ち伏せされ、水蛇に心臓を噛みつかれて命を落とし、その体をバラバラにされてしまいます。息子の死を知った母親は川に行き、バラバラになった体を集めて、神に祈りました。そして創造神の膏薬を塗ると、レンミンカイネンは息を吹き返します。「**レンミンカイネンの帰郷**」では、蘇ったレンミンカイネンが故郷へと向かう様子が力強く描かれます。



『レンミンカイネンの母』(アクセリ・ガッレン=カッレラ作)

追放されたキャンディードが旅の末に見つけたもの

バーンスタインの舞台作品『キャンディード』は、ミュージカルともオペラとも呼べるような作品です。原作はフランスの哲学者ヴォルテールが書いた風刺小説「カンディード」。主人公である若者キャンディードは故郷を追放され、恩師の「現実社会に起きるあらゆる物事はみな最善である」という楽天主義の教えを胸に旅に出ます。そこで体験したのは戦争や大地震、異端審問、盗賊など……。理不尽な現実を目の当たりにして、主人公は楽天主義と決別し、日々の労働にこそ人生の意味があるのだと悟ります。

冒頭に演奏される序曲は晴れやかで、しばしば単独で演奏される人気曲。輝かしくスピード感あふれる冒頭部分に、劇中で使用される主要メロディが続き、躍動感あふれる楽想がくりひろげられます。吹奏楽版で親しんだという方もいらっしやることでしょう。



スピルバーグ監督のリメイクでも話題に、 ミュージカル作品の金字塔

スティーヴン・スピルバーグ監督がリメイクして話題を呼んだ映画『ウエスト・サイド・ストーリー』(2022年)はご覧になりましたか。映画としての完成度の高さに加えて、バーンスタインの音楽に改めて感銘を受けた方も多いのではないのでしょうか。

「シンフォニック・ダンス」は『ウエスト・サイド物語』のダンスナンバーを中心に集めた演奏会用の組曲です。ミュージカルや映画に親しんでいる方はもちろんのこと、ストーリーを知らずとも純粋に音楽のみで楽しめるように書かれており、バーンスタイン屈指の人気曲となっています。

曲は9つの部分からなり、切れ目なく演奏されます。冒頭の「プロローグ」では有名なフィンガースナップに続いて、サクソフォンによるジャズ調のメロディが登場。ジェッツとシャークスの対立が緊迫感を高めますが、警官の笛で遮られます。

続く「サムホエア」は憧憬に満ちた音楽。安らぎの地を夢見ますが、物語は悲劇へと突き進みます。短い「スケルツォ」を経て、エネルギッシュな「マンボ」へ。体育館でのダンスパーティで熱気が渦巻きます。「チャチャ」と「出会いの場面」では、トニーとマリアが出会い、互いにひとめぼれをします。しかしロマンティックなムードはほんの一瞬のこと。「クール・フーガ」で決闘を前にしたジェッツのメンバーたちは興奮を抑えられません。そして「決闘」で悲劇が起こります。最後の「フィナーレ」は、トニーの遺体をジェッツとシャークスがともに運ぶ弔いの音楽。生き残ったマリアは希望を見いだせるのでしょうか。

いいお・よういち（音楽ジャーナリスト）／著書に『クラシック音楽のトリセツ』（SB新書）、『R40のクラシック』（廣済堂新書）、『マンガで教養 やさしいクラシック』監修（朝日新聞出版）、『クラシックBOOK』（三笠書房）他。雑誌やウェブ、コンサート・プログラム等に幅広く執筆する。テレビ朝日「題名のない音楽会」他、放送でも活動。